

「最高の教育は男子に限るものにあらず、女性にも同様の機会を」 北大初代総長 佐藤昌介 ―(その3)―



佐藤昌介
Sato Shosuke

「リテラボブリ」は、北海道大学（及び、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉をお届けします。

次のように述べている。

戦前、最高学府である帝国大学には、原則として、高等学校・大学予科の卒業生が入学した。女性は高等学校・大学予科に入学できなかったため、大学進学のリートからはずれていた。女性が制度的に大学へ入学できるようになったのは、一九四七年からである。

佐藤昌介が北海道帝国大学の初代総長として在任中、北大では女性の入学を実現した。一九一八年九月加藤セチが全科選科生現在の科目等履修生として、入学したのである。

一九一八年七月九日、東京女子高等師範学校の修学旅行団が、加藤セチら札幌の同窓生と共に初めて北大を訪れた際に、佐藤昌介は歓迎の挨拶をした。佐藤は、その時の様子を

▼「私は先年欧米から帰つて東北大学に講演を致しました際に三人の女学生がありまして。是は時の総長澤柳博士が大英断を以て入学を許容されたのであつたが、其の三人は立派に卒業しました。併し後が続かぬので今は前にも後にも只この三人だけに止まつて居ります。先達東京女子高等師範学校の学生が参られましたから、私の大学は大いに門戸を開放いたしますから、御希望者は遠慮はいらぬ……と申したら冗談と思はれて居たかも知れぬが、自分は真実左様に信じて居るのであります。」〔北海道教育』第二号、一九一八年、二〇頁〕

一度勉強のやり直しをしよう」と、北大に入学願書を提出したのが加藤セチである〔札幌同窓会誌』第二号、五五頁〕。

佐藤昌介の意に反して、教官の間では反対意見が強かった。苦肉の策として「学生」ではなく「全科選科生」として加藤セチを入学させた。一九二〇年には、加藤の後輩にあたる本間ヤスも、全科選科生として入学する。



3月学校の
年学茶の
1918年
セチ高等師範
女子念写真、お
加藤女子大学所蔵
卒業生
卒業生
卒業生
卒業生

▼「先年お茶の水〔東京女子高等師範学校〕の生徒さんが北海道に見学に来られた時婦人のために大学を開放してもよいといふ事を私が申したところが、その案内に当つて居られたお茶の水出身のさる女学

校教諭〔北星女学校教諭、加藤セチ〕が職を抛つて大学に入学せられました。始めてであるから実はどうかと思つて居ました。また男学生の方もあまり歓迎せず多しうぢめるやうな振舞もあつたやうでありましたのに、本人は一向平気で勉強をつゞけ遂には男子からノートを借りられるといふわけで、二年間には男子を凌駕して選科生の首席となつて卒業しました。その人は大学院〔実際は副手勤務〕に入り今は東京の理化学研究所に居ります。又今一人の女性〔本間ヤス〕で全部選科をとほつて現に大学院〔副手勤務〕に居るものもあります。〔宮城県第二高等女学校『学友会雑誌』第七号、一九二七年、一〇頁。〕補足は山本）

加藤セチ・本間ヤスの存在は、女子教育と大学教育の問題点をえぐり出し、佐藤昌介の女子教育論に深みを与えていく。

佐藤昌介は、東京女子

高等師範学校関係者の前で北大では女性の入学を認めると、高らかに宣言した。「よしそれではもう



リテラポプリ 2

「最高の教育は男子に限るものにあらず、女性にも同様の機会を」
北大初代総長 佐藤昌介一 (その3)
大学文書館 山本 美穂子

特集：北大は口の中からいのちを診る 4

座談会

歯学研究科 北川 善政
兼平 孝
土門 卓文

カニの殻からヒトの骨をつくる
歯学研究科 柏崎 晴彦

腫瘍血管を攻撃する
新たな抗がん剤の開発をめざして
歯学研究科 樋田 京子

カーボンナノチューブでミュータンス菌を捕まえる
歯学研究科 赤坂 司

施設探訪 15

人獣共通感染症リサーチセンター
広報課 三分一 利恵

虫と石⑤ 16

ツシマヘリビロトゲトゲ
総合博物館 大原 昌宏
方解石の仲間
総合博物館 松枝 大治

もういちど北大と出会う(その十五) 18

途上国へ
原田歯科 原田 祥二

information 19

建築設計図が語る北大の歴史(第15回) 20

植物園旧事務所
工学研究科 池上 重康



佐藤昌介「女子教育の急務」(1922年10月11日付「相互新聞」、佐藤カツミ氏・ユリ氏寄贈資料「佐藤昌介旧蔵スクラップブック」大学文書館蔵)

▼「高等学校令第一条は男子の為に高等学校を設立する事を明示して、女子の為に堅く門を閉ぢてゐる。故に今日女子の高等教育を施すには新たに女子の高等学校を設立するか、高等学校令を改正して共学を許さなければ、如何に女子の中等教育を充実しても、その進路は此処に閉塞されるのである。女子教育の向上の階梯は第一次に高等女学校の学科目改善、第二次には高等学校の新設又は共学を要するのである。(略)高等普通教育を卒へて更に大学教育を望む女

子には、大学は門戸を開放して女子を収容すべきである。既に(略)北海道大学には選科生として(略)女子高等師範の卒業生を入学せしめてゐる。これ等の女子は概ね成績良好で優秀な成績で卒業してゐる。然し高等普通教育を受け得ない為めに、専門の学科は男子と同等であるにも拘らず学士と称することが出来ない。即ち女子の高等教育機関のない為め男子同様の卒業生として社会に出られない結果を生ずるのである。」(一九二二年一〇月二日付「相互新聞」)

▼「抑々最高学府タル教育機関ハ、宇宙万有理学部創設準備が着々と進んでいた一九二八年二月六日、佐藤昌介は、北海道帝国大学第十回記念式の式辞において、女性の入学について語った。

▼「抑々最高学府タル教育機関ハ、宇宙万有

ノ知識ヲ網羅研究スルモノテアルト同時ニ、知識ヲ要求スル所ノ総テノ人類ニ向ツテ、其ノ門戸ヲ開放スヘキテアル。コノ意義ニ於テ、最高ノ教育ハ独リ男子ニ限ルヘキモノアラシテ、女性ニ対シテモ同様ノ機会ヲ均等ニ与フルコトハ、文化ノ進展上緊要ノコトテアルト思フ。」(一九二八年二月六日付「北海道帝国大学新聞」。句読点付加は山本)

一九三〇年、理学部は、入学資格に女子高等師範学校卒業を加え、「学生」としての女性の入学を認めた。理学部開設と同時に、吉村フジが、初めて学生として入学した。

女性の学生入学を見届け、同年二月、佐藤昌介は総長を勇退した。

大学文書館 山本 美穂子
Yamamoto Mihoko